

建安文人の「大暑賦」をめぐって

小 嶋 明 紀 子

はじめに

中国の古典文学においては、春・秋を文学の題材として詠うことが多く、春・秋の季節の描写が発達を遂げたのに対して、夏・冬を文学の題材として詠うことは比較的少なかった。松浦友久は『中国詩歌原論』において「春秋の詩の多さと夏冬の詩の乏しき」を指摘している。^①

古代に目を向けると、『詩経』の作品のうち、夏を詠ったことがはっきりしている例としては、唐風・葛生の「夏之日、冬之夜、百歳之後、歸於其居（夏の日、冬之夜、百歳の後、其の居に帰せん）」が挙げられる。夏の昼は長く、冬の夜は長く感じられるという意である。

また逯欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』（中華書局）に収める詩・樂府のうち、先秦から後漢ごろまでの作品（後述する建安文人の作品より以前のものに限る）を概観すると、夏を取り上げたものは漢代の鏡歌の一つ「上之回」一首に止まる。

上之回、所中益。夏將至、行將北。以承甘泉宮、寒暑徳。

（上の回に之く、所中益し。夏の將に至らんとするや、行將に北せんとす。以て甘泉宮に、寒暑の徳を承けん）。

上記の「上之回」以外にも夏に言及する作品は見られるものの、春夏秋冬が順調に巡っていることを寿ぐ内容に止まり、夏を中心に取り上げて詠う作品はない。

なぜ夏は詩の題材とされることがほとんどないのであるか。理由としては、中国では、夏が快適な季節でなかったことや、『礼記』月令・仲夏之月に「是の月や、日長至り、陰陽争ひ、死生分かる」と、夏至が忌むべき時期と規定されたことなどが原因と推測される。

詩と並ぶ中国文学の代表的文体である賦に目を転じて、夏を主な題材とした賦はわずかに後漢の朱穆の「鬱金賦」に止まる。これは夏の日の鬱金の美しさを詠ったものである。上記の数少ない作品を除けば、後漢末に至るまで、夏が文学の題材となることは殆ど無かった。しかし、後漢末の建安期の文人の作品には少なからぬ変化が認められる。

周知の通り、建安の文人というのは、建安（一九六～二二〇）に活躍した文人達の通称である。ここではいわゆる三曹七子および、ほぼ同時代に活躍した繁欽、楊脩も含め、建安の文人と総称し、論を進める。

鈴木修次は『漢魏詩の研究』の中で、建安の文人の賦のうち「建安の作賦活動において、その題材を共通に行っていると考えられるもの、あるいは類似の題に従うもの」を表にしてまとめ、賦の作品群を題ごとに分類している。さらに、同書五一九頁において「愁霖賦」「喜霽賦」「大暑賦」を「物候に関係する賦」と捉えた上で、「建安賦のひとつの特色とも考えられるべきものであろう」と述べている。

鈴木はこの表において、「大暑賦」のグループに曹植、王粲、劉楨、陳琳の「大暑賦」と繁欽の「暑賦」を挙げている。この他に、三曹七子と同時代の楊脩も「臨淄侯に答ふるの牋」（『文選』卷四十）において「暑賦」を制作したことを述べる。同題の作品数の多さは、「大暑賦」「暑賦」が建安の文人の競作であった可能性を示唆する。

次に、賦と同じく中国の文学の主要な文体である詩（小稿は、樂府詩も詩に含めて論じる）に目を向けると、建安文人の詩のうち夏を舞台としたものとして、同時代の曹丕の「夏日詩」、王粲「公讌詩」、曹植「苦熱行」が挙げられる。ゆえに、

「夏」の季節、およびそれに付随する「暑」の題材化は賦と詩・楽府の文体でほぼ同時に発生したと推測される。前述の建安文人の「大暑賦」「暑賦」は類書等に断片と思しき部分を残すものであり、その全体像を窺うのは難しいけれども、いま試みにこれらを一群の作品として捉えて特徴を明らかにしていきたい。

前掲の鈴木修次以外にも、建安文人の「大暑賦」「暑賦」の制作年代などについて論じた研究は見られるけれども、内容について詳細に考察した研究は管見の限りでは見いだせない。小稿は、曹植「大暑賦」王粲「大暑賦」劉楨「大暑賦」陳琳「大暑賦」繁欽「暑賦」を建安文人の「大暑賦」作品群と総称し、内容および表現を中心に考察を加えたい。

一、「大暑」とは何か

本小節ではまず建安文人の「大暑賦」の題に用いられる「大暑」の語の定義について論じたい。

「大暑」とはいわゆる二十四節気の一つである。^⑥「大暑」の時期を詳細に定義したものととして早いものに晋の司馬彪撰『後漢書』律曆志下がある。その二十四気うちの「大暑」の記述を挙げる。(注に示された端数も鉤括弧に入れて挙げるが、論を進めるに当たって端数は切り捨てる。)

二十四気	日所在	黄道去極	晷景	昼漏刻	夜漏刻
...
大暑	星四度(二分進一)	七十	二尺	六十三(八分)	三十六(二分)

昏中星

且中星

…

…

尾十五（半弱退三） 婁三（大退一）

なお唐の房玄齡等撰『晋書』律曆志下の中節二十四気、梁の沈約撰『宋書』律曆志中の中節二十四気も「大暑」について右の『後漢書』律曆志とほぼ同じ数値を記しているため、後漢から晋宋のころの「大暑」の定義をここに求めて差し支えなからう。（ただし『宋書』律曆志下に見える宋の元嘉曆の記述は異なる。）

この『後漢書』律曆志下の二十四気の記事を、恒星の位置に基づく測定と、晷景・漏刻に基づく測定に二分し、後漢から晋宋のころの「大暑」の定義を明らかにしたい。恒星の位置は、歳差運動のため、時代により変化する。いつぼう、冬至や夏至を基準とした、晷景・漏刻に基づく測定は、毎年変化がない。そのため、両者を区別して考える必要がある。

恒星の位置に基づく測定の記事によると、「大暑」は日躔が星（二十八宿の一、うみへび座 α を距星とする）の四度、昏中星（『後漢書』は「昏」を「昏」字に作るけれども、以下「昏」字に統一して論ずる）は尾（二十八宿の一、さそり座 μ を距星とする）の十五度、且中星は婁（二十八宿の一、おひつじ座 β を距星とする）の三度にある時と定義されている。司馬彪が建安の文人とそれほど時代が隔たっていないことから、建安の文人にとつての「大暑」の時期の恒星の位置の定義はこれに相当するものと仮定して論を進めたい。後述するように、建安文人の「大暑賦」作品群、およびそれに影響を受けた作品において天文に関する描写が見られるため、日躔・昏中星・且中星の定義はとくに重要である。

後者の晷景・漏刻に基づく測定の記事によると、「大暑」とは、夏至から数えて一年に二十四分の二を掛けた日時が経つた時と定義できる。

次に、いわゆる陽曆と陰曆の配当の問題について確認したい。周知の通り、中国においては伝統的に太陰太陽曆が用いら

れていた。後述する建安文人の「大暑賦」作品群は、陽暦を基準とする二十四節気の「大暑」が陰暦の「季夏之月」や「六月」に当たることを詠うものが多い。中国においてはたたび改暦が行われ、漢の武帝の時の太初暦において、夏暦に倣い冬至の斗建を寅に決定するまで、歳首を十月に置くなど、農耕生活にそぐわない暦が用いられていた。ゆえに、陽暦の「大暑」が陰暦の「季夏之月」や「六月」に当たるのが太初暦採用以降であることをまず指摘したい。後述するように建安文人の「大暑賦」作品群においては好んで『礼記』月令・季夏之月に見える語を用いるのであるが、「大暑」の語は『礼記』月令には見えず、陽暦を基準とする「大暑」が陰暦の「季夏之月」に当たるという発想自体が、『礼記』より後の時代の観念の産物である。(二十四節気のうち「小暑」ならば『礼記』月令・仲夏之月に「小暑至る」と見える。「季夏之月」でなく「仲夏之月」に配当されていることに注意されたい。)ゆえに、陽暦の「大暑」が陰暦の「季夏之月」や「六月」に当たると詠うこと自体が、文人好みの知的な表現なのである。一年が孟春之月から始まることが暦の上でも実感される感覚は、漢代においては太初暦に改暦してから初めて可能なのである。

ところで、魏晉の文人の作品における季節感の表現には月令の語彙の使用が多いことは小尾郊一が既に指摘している^⑩。本稿で取り上げる建安文人の「大暑賦」もまた、『礼記』月令の語彙の使用が非常に多い。すなわち、「大暑」の語が『礼記』月令に見えないにも関わらず、『礼記』月令の語彙を多用して、「大暑」の季節感を表現しようと試みているということになる。これについては次節で詳述したい。

二、建安文人の「大暑賦」の特徴

本節では建安文人の「大暑賦」作品群の内容・表現の傾向を掴むため、まずこれらの代表として曹植の「大暑賦」と王粲の「大暑賦」を取り上げ、内容と構成について分析したい。曹植(一九二〜二三二)の「大暑賦」を挙げる^⑪。

- 1 炎帝掌節、
炎帝節を掌り、
- 2 祝融司方。
祝融方を司る。
- 3 羲和按轡、
羲和轡を按じ、
- 4 南雀舞衡。
南雀衡を舞はず。
- 5 蛇折鱗於靈窟、
蛇は鱗を靈窟に折り、
- 6 龍解角於皓蒼。
龍は角を皓蒼に解く。
- 7 遂乃温風赫曦、
遂に乃ち温風赫曦たり、
- 8 草木垂幹。
草木幹を垂る。
- 9 山坼海沸、
山は坼け海は沸き、
- 10 沙融礫爛。
沙は融け礫は爛る。
- 11 飛魚躍渚、
飛魚は渚に躍り、
- 12 潜鼃浮岸。
潜鼃は岸に浮く。
- 13 鳥張翼而近栖、
鳥は翼を張りて近く栖み、
- 14 獸交游而雲散。
獸は交游して雲のごとく散る。
- 15 於時黎庶徙倚、
時に於いて黎庶は徙倚し、
- 16 棋布葉分。
棋のごとく布き葉のごとく分る。
- 17 機女絶綜、
機女は綜を絶ち、
- 18 農夫积耘。
農夫は耘を积つ。
- 19 背暑者不群而齐跡、
暑きに背く者は群せずして跡を齐しうし、

- 20 向陰者不会而成群。 陰に向かふ者は会せずして群を成す。
- 21 於是大人遷居宅幽、 是に於て大人 居を遷し幽ふかきに宅をり、
- 22 緩神育靈。 神こころを緩やかにし靈を育む。
- 23 雲屋重構、 雲屋構を重ね、
- 24 閑房肅清。 閑房肅清たり。
- 25 寒泉涌流、 寒泉 涌つき流れ、
- 26 玄木奮榮。 玄木 榮ふるを奮ふ。
- 27 積素氷於幽館、 積素 幽館に氷り、
- 28 氣飛結而為霜。 氣 飛結して霜と為る。
- 29 奏白雪於琴瑟、 白雪を琴瑟かなに奏かなで、
- 30 朔風感而増涼。 朔風に感じて涼を増す。
- 一転して「大人」の避暑の楽しみを詠う。
- 次に王粲（一七七〜二一七）の「大暑賦」を見てみたい。¹²
- 1 惟林鍾之季月、 惟れ林鍾の季月、
- 2 重陽積而上昇。 重陽 積みて上昇す。
- 3 喜潤土之溽暑、 土を潤すの溽暑を喜び、
- 4 扇温風而至興。 温風を扇あふぎて興きんに至す。
- 5 獸狼望以倚喘、 獸は狼のごとく望みて以て倚喘いせんし、

- 6 鳥垂翼而弗翔。 鳥は翼を垂れて翔ける弗し。
- 7 遠昆吾之中景、 昆吾の中景を遠くすれども、
- 8 天地翕其同光。 天地翕りて其れ光を同じうす。
- 9 征夫瘼於原野、 征夫原野に瘼み、
- 10 処者困于門堂。 処る者門堂に困しむ。
- 11 患衽席之焚灼、 衽席の焚灼するを患ふ、
- 12 譬烘燎之在牀。 譬ふれば烘燎の牀に在るがごとし。
- 13 起屏營而東西、 起ちて屏營として東西し、
- 14 欲避之而無方。 之を避けんと欲するも方無し。
- 15 仰庭槐而嘯風、 庭槐を仰ぎて風に嘯かんとするも、
- 16 風既至而如湯。 風既に至りて湯の如し。
- 17 於是帝后順時、 是に於いて帝后時に順ひ、
- 18 幸九嶷之陰岡。 九嶷の陰岡に幸す。
- 19 託甘泉之清野、 甘泉の清野に託し、
- 20 御華殿于林光。 華殿を林光に御す。
- 21 潜広室之邃宇、 広室の邃宇に潜み、
- 22 激寒流於下堂。 寒流を下堂に激しうす。
- 23 重屋百層、 屋を重ぬること百層、
- 24 垂陰千廡。 陰を垂ること千廡。

- 25 九鬮洞開、 九鬮の洞は開き、
 26 周帷高挙。 周帷高く挙がる。
 27 堅氷常奠、 堅氷常に奠げ、
 28 寒饌代叙。 寒饌代はるがはる叙づ。

内容から作品を二分すると、前半は第1句〜第16句で、「暑さ」を様々な角度から俯瞰的に描いている。後半は第17句〜第28句で、「帝后」の避暑の楽しみを詠う。詩語にそれぞれ工夫を凝らしてはいるものの、曹植「大暑賦」王粲「大暑賦」の詠うものは同じと言っても過言ではない。

次に、この二篇の作品の内容のうち、前半の「暑さ」を詠う描写を分析し、他の建安文人の「大暑賦」作品群との共通点を分析していきたい¹³⁾。なぜなら他の「大暑賦」作品群の描写はほとんど「暑さ」を詠う場面のみであり、避暑の楽しみを詠う部分は見られないからである。

まず、前掲の曹植「大暑賦」、王粲「大暑賦」二篇の前半の「暑さ」の描写の要素を分析すると、おおよそ次のA〜Fの六つの要素に分類できる。

- A 「夏の到来」。
 B 「作者自身が捉えた暑さの感覚」。
 C 「作者が暑さに苦しむ様子」。
 D 「天地、山川の様子」。
 E 「動植物の様子」。
 F 「庶民の様子」。

この六つの要素について、「大暑賦」作品群から代表的な描写を挙げ論じたい。

まず、A「夏の到来」について検討したい。曹植は「大暑賦」において、「炎帝節を掌り、祝融方を司る。義和轡を按じ、南雀衡を舞はず」と詠い、王粲は「大暑賦」において「惟れ林鍾の季月、重陽積みて上昇す。土を潤すの溽暑を喜び、温風を扇ぎて興を至す」と詠う。いずれも次に挙げる『礼記』月令・季夏之月の記事に基づく表現である。

季夏の月、日は柳に在り、昏に火中し、旦に奎中す。(中略)其の帝は炎帝、其の神は祝融。(中略)其の音は徵、律は林鍾に中る。(中略)温風始めて至る。(中略)是の月や、樹木方に盛んなり。(中略)水潦盛昌、神農将に功を持せんとす。(中略)是の月や、土潤ひ溽暑にして、大雨時に行く。燒糶して水を行る、以て草を殺すに利し。熱湯を以てするが如し、以て田疇を糞すべし、以て土疆を美しくすべし。

この他、五行思想に関する語も多く見られる。『礼記』月令・孟夏之月(季夏之月ではない)に五行の配当が示され、夏の色は「朱」、方位は「南」と述べられ、また、『漢書』律曆志上は五行思想により夏に「衡」(はかりのさお)を配当する。建安文人はこれらの記事にも影響を受けている。建安文人の「大暑賦」作品群と、後節で論じる西晋の夏侯湛の「大暑賦」、晋宋ごろの人、卜伯玉の「大暑賦」における、『礼記』月令および五行思想の影響を明らかにするため、次の表に語彙をまとめた。

表 「大暑賦」 語彙表

※注……（ ）内は佚句に見られるもの。

7	6	5	4	3	2	1	題	自然数の月名	方位	色	帝	神	律	風	日躔	昏星	乾湿	服飾	その他
卜伯玉	夏侯湛	繁欽	陳琳	劉楨	王粲	曹植	大暑賦		南雀	(黄)	炎帝	祝融	林鍾	温風			(蒸)		義和・衡
大暑賦	大暑賦	暑賦	大暑賦	大暑賦	大暑賦	大暑賦		六月											
										朱煙		祝融	林鍾	温風	鶉首	辰・星火	溽暑	絺葛	
																			三伏
																			大火
																			義和・靈威

表に明らかなように、建安文人は『礼記』月令・季夏之月の記事の語彙、および『礼記』月令において、五行配当で夏に配当される語を賦に盛り込むことに強い志向を示し、他の文献における月令記事に『礼記』月令の記事と齟齬する内容があっても無視に近い態度を取る。たとえば次の三点が指摘できる。

第一に、風については、『礼記』月令・季夏之月に見える「温風」の語のみ用い、『淮南子』天文訓、墜形訓に見える、季節を表す八風についての記事は全く無視している。

第二に、律については、『礼記』月令・季夏之月に見える「林鍾」の語のみ用い、『淮南子』天文訓において「林鍾」が立春から三十日、秋分から十五日の時節に配される記事は全く無視している。

第三に、五行思想については、『礼記』月令・孟夏之月で夏の色、方角として配当される「朱」、「南」の語（季夏之月にはこれらの記述がないけれども孟夏之月において説明されているので、季夏之月の五行の配当もこれに準じるとみなす）の

み用い、『淮南子』時則訓において季夏之月が五行で「土」に配当されることは無視している。ただし曹植「大暑賦」の佚句（『曹集詮評』引御覽三十四）、「玄服革而尚黄（玄服革まりて黄を尚ぶ）」は例外である。

建安文人の意識は『礼記』月令の季節観を強固に志向しており、それに則った上で、「大暑」の時節をどのように描くか工夫を凝らしている。とりわけ「温風」「溽暑」の語については、語彙として盛り込むに止まらず、これをさらにパラフレーズして、熱風や蒸し暑さのイメージをふくらませ、賦の内容を豊かにするための一助としている。「温風」の語を例に取るなら、曹植は「大暑賦」において「遂に乃ち温風 赫曦たり、草木 幹を垂る」と、「温風」が激しいため草木も垂れてしまふと詠う。『礼記』月令・季夏之月の注疏には「温風」の語に関する説明がなく、どのような風を指すのか不明である。しかし、建安文人の「大暑賦」作品群においては「温風」は曹植「大暑賦」と同じく、すべて熱風として表現されている。

次に、B「作者自身で捉えた暑さの感覚」について説明したい。これは『礼記』月令に基づく語を用いず、作者独自の表現で「暑さ」を描写したものである。王粲は「大暑賦」において「衽席の焚灼するを患ふ、譬ふれば烘燎の牀に在るがごとし」と、寢床で火が燃えているようだと言い、また劉楨は「大暑賦」において「若熾燎之附体、又温泉而沈肌。（熾燎の体に附くが若く、又た温泉に肌を沈むるがごとし）」と、たいまつが体にくっつき、温泉に肌を沈めるようだと言う。それぞれ、『礼記』月令に基づく語を用いず、ユニークな表現を作り出している。

次に、C「作者が暑さに苦しむ様子」について説明したい。王粲は「大暑賦」において「起ちて屏营として東西し、之を避けんと欲するも方無し」と、立ち上がつてうろろろするけれども、暑さを避けようにもどこにも行く場がない、と詠う。繁欽は「暑賦」において「雖託陰宮、罔所避施。……粉扇靡救、宴戲尠歛。庶望秋節、慰我愁歎。（陰宮に託さんとすと雖も、旃を避くるに所罔し。……粉扇も救くる靡く、宴に戯しまんとするも歛尠し。秋節を庶望し、我が愁歎を慰む）」と、秋の到来を待つしかなないと詠う。劉楨は「大暑賦」において「温風至而増熱、歎愴惛而無依。披襟領而長嘯、冀微風之来思（温風至りて熱を増し、歎として愴惛たりて依る無し。襟領を披きて長嘯し、微風の来思るを冀ふ）」と、襟を開き、微風

が来るのを待つのみと詠う。いずれも暑さの前になすすべのない作者の姿を諧謔的に表現している。

次に、D「天地・山川の様子」について説明したい。これは世界を巨視的に捉えて「暑さ」を描写した部分である。曹植は「大暑賦」において「山は坂け海は沸き、沙は融け礫は爛る」と詠う。また王粲は「大暑賦」において「昆吾の中景を遠くすれども、天地翕りて其れ光を同じくす」と、「昆吾」（『淮南子』天文訓に見える、太陽の通過する地点）は遠くにあるにも関わらず、天地が全て光で覆われていると詠うことにより、太陽の光の強さを表現している。

次に、E「動植物の様子」について説明したい。曹植は「大暑賦」において「鳥は翼を張りて近く栖み、獸は交游して雲のごとく散る」と詠い、王粲は「大暑賦」において「獸は狼のごとく望みて以て倚喘し、鳥は翼を垂れて翔ける弗し」と詠う。また劉楨は「大暑賦」において「獸喘氣於玄景、鳥戢翼於高危（獸は氣を玄景に喘ぎ、鳥は翼を高危に戢む）」と詠う。いずれも鳥と獸を対にして、暑さに苦しむ姿を表現している。

次に、F「庶民の様子」について説明したい。曹植は「大暑賦」において「時に於いて黎庶は徒倚し、棋のごとく布き葉のごとく分る。機女は綜を絶ち、農夫は耘を積つ。暑きに背く者は群せずして跡を斉しうし、陰に向かふ者は会せずして群を成す」と詠う。また劉楨は「大暑賦」において「農峻捉罇而去疇、織女积杼而下機（農峻は罇を捉へて疇を去り、織女は杼を积つて機より下る）」と詠う。いずれも、農夫や織女が暑さのあまり労働を放棄する姿を描く。また王粲は「大暑賦」において「征夫原野に瘼み、処る者門堂に困しむ」と詠う。これは、野外にいる者も家の中にいる者もともに苦しむ姿の描写である。

以上のように建安文人は「大暑賦」作品群において、様々な要素を用い、工夫を凝らして暑さを描いている。描写の対象や表現は共通点が非常に多く、競作の可能性の高さを示している。

三、建安、魏晋期の詩に見られる暑さの表現

前節は建安文人の「大暑賦」作品群における暑さの表現について論じた。本小節は同時代の詩、および後の魏晋の詩における暑さの表現を取り上げ、建安文人の「大暑賦」作品群との比較を行いたい。

「はじめに」で前述したように、建安文人が夏を主に詠った詩は曹丕「夏日詩」、王粲「公讌詩」、曹植「苦熱行」である。¹⁴このうち曹丕は「夏日詩」冒頭において「夏時饒温和、避暑就清涼（夏時 温和饒かなり、避暑して清涼に就く）」と述べたあと宴会の楽しさを描く。王粲は「公讌詩」において「涼風撤蒸暑、清雲却炎暉（涼風 蒸暑を撤き、清雲 炎暉を却く）」と述べたあと避暑の楽しさを描く。曹植「苦熱行」は「行遊到日南、經歷交趾郷。苦熱但曝露、越夷水中蔵（行遊して日南に到り、經歷す交趾の郷。苦熱但だ曝露たり、越夷水中に蔵る）」の四句のみであるが、南方遠征の苦しみと、越人が暑さから逃れるために水中にもぐる様を詠っている点が注目される。いずれも夏や暑さを詩の題材としようと試みているものの、夏や暑さを描写した句数が少ないため、建安文人の「大暑賦」作品群における丹念な描写と比較して論じるのは難しい。それでは建安文人よりもやや下る魏晋の文人の作品はどうであろうか。¹⁵暑さを詠って著名な詩に晋の程曉の「嘲熱客詩（熱客を嘲る詩）」が挙げられる。程曉、字は季明、魏晋のころの人で、建安文人よりやや時代が遅れる。

平生三伏時、道路無行車。閉門避暑臥、出入不相過。今世襪襪子、触熱到人家。主人聞客来、輦蹙奈此何。（中略）揺扇臂中疼、流汗正滂沱。（後略）

（平生三伏の時、道路に行車無し。門を閉ざし暑を避けて臥し、出入相ひ過ぎらず。今の世の襪襪子、熱を触して人家に到る。主人客の来たるを聞き、輦蹙すれども此を奈何せん。（中略）扇を揺らせば臂中疼み、流汗正に滂沱たり。（後略）

猛暑の中、正装して人の家を訪問する野暮な人の姿を諧諷的に詠う。「三伏」は夏至のあとの三回目と四回目の庚の日と、

立秋後の初めての庚の日で、最も暑い頃とされる。この語は『礼記』月令に見えない語であり、建安の文人の「大暑賦」作品群でも用いていない語である。

ところで、程曉と交流のあった傅玄の作品に暑さの描写が見られることも注目される。傅玄、字は休奕、魏と晋に仕えた。傅玄に「答程曉詩」「又答程曉詩」があり、程曉に「贈傅休奕詩」があるため、二人の交流が確認できる。

傅玄の「雜詩」に「朱明運將極、溽暑昼夜興。裁動四支廢、拳身若山陵。珠汗治玉体、呼吸氣鬱蒸（朱明運將に極まらんとし、溽暑 昼夜に興く。裁動せんとするも四支廢し、身を挙げんとするも山陵の若し。珠汗玉体に治く、呼吸するも氣は鬱蒸たり）」の句が有る。動こうとしても四肢がだるく、体を起こすのは山を動かすほどに辛い、という描写には程曉の「嘲熱客詩」に通じる諧謔性が感じられる。また彼の「詩」に「炎旱歷三時、天運失其道。河中飛塵起、野田無生草（炎旱三時を経、天運 其道を失ふ。河中に飛塵起き、野田に生草無し）」と見える。また「雜詩」に「炎景時鬱蒸、海沸沙石融（炎景時に鬱蒸たり、海は沸き沙石は融く）」と見える。以上の三首は残存する篇幅が短く、暑さの描写が一篇の中でどのような役割を果たしていたか不明である。しかし、これらの詩の暑さの丹念な描写は建安文人の「大暑賦」作品群に似通っている。

程曉・傅玄の詩の暑さの描写は、諧謔性と丹念さにおいて建安文人の「大暑賦」作品群を継承しているのである。

次に、魏晋の詩にはこれと異なる系統の暑さの描写が見られることを指摘したい。それは暑さが苦悩や不安の心情を強調するために描写されているものである。

魏の阮籍の「詠懷詩」のうち、『文選』十七首中の第十三首は「炎暑惟茲夏、三旬將欲移（炎暑惟れ茲の夏、三旬にして將に移らんと欲す）」の句から始まり、四言の「詠懷詩十三首」の第四首は「陽精炎赫、卉木蕭森。谷風扇暑、密雲重陰（陽精は炎赫たり、卉木は蕭森たり。谷風 暑を扇ぎ、密雲重陰たり）」から始まる。これらはどちらも季節の移り変わりが作者の心を苦しめるという内容に続いていき、この世に変化しないものはないという真理を強調する役割を果たしている。

また五言の「詠懐詩八十二首」第五十二首は「十日出暘谷、弭節馳万里。経天耀四海、倏忽潜濛汜。誰謂焱焱久、遊没何行俟（十日暘谷に出で、節を弭へて万里に馳す。天を経て四海に耀き、倏忽として濛汜に潜る。誰か謂はん焱焱たること久しと、遊没せば何くに行き俟たん）」の句から始まる。伝説上の激しく燃える十個の太陽すらも滅びる時が来るといふ嘆きは、作者の不安の描写に続いていく。

阮籍の詩における暑さの描写は、もっぱら作者の懊悩を強調する役割を果たしている。

以上のことから、建安文人の「大暑賦」作品群の暑さの描写が後の時代の作品に与えた影響の強さを窺うことができる。しかし、この後、東晋までの詩を見ると、建安文人の「大暑賦」作品群の暑さの描写を継承した作品を見いだすことが出来ない。魏から西晋にかけては春、秋、冬を題材とした作品は多く見られるけれども、夏を題材とした作品は見られず、さらに、東晋の作家に至ると季節を描写する情熱が衰えてしまっているからである。

四、晋宋の文人の「大暑賦」

建安文人の「大暑賦」作品群は後代の同題の賦にどのような影響を与えているのであろうか。本小節では西晋の夏侯湛の「大暑賦」、晋宋ごろの卞伯玉の「大暑賦」を取り上げ、建安文人の「大暑賦」作品群との共通点・相違点を検討したい。

西晋の夏侯湛（二四三〜二九一）、字は孝若、魏王朝と関係のある名家の出身である。夏侯湛の「大暑賦」は、建安文人の「大暑賦」作品群に似通うものの、次の二点に建安文人の「大暑賦」作品群に見られない特徴がある。

一つ目は「爾乃土墳地坼、谷枯川竭。寒泉潜沸、氷井騰沫（爾乃ち土は墳ぎ地は坼け、谷は枯れ川は竭く。寒泉潜かに沸き、氷井沫を騰ぐ）」の四句である。この部分は『礼記』月令・仲冬之月「氷益壯、地始坼（氷益ます壯に、地始めて坼く）」に基づく。夏の情景を詠うのに『礼記』月令で冬について述べた部分の表現を用い、「暑さのために氷った井戸すら湧

き出してしまふ」と詠う点に妙味がある。

二つ目は「沃新水以達夕、振輕箑以終日（新水に沃して以て夕に達し、輕箑を振ひて以て日を終ふ）」の二句で、水浴びや扇による消暑法を詠っている。これは曹植「大暑賦」や王粲「大暑賦」の豪華な避暑の描写に比すると、つつましい印象を与える。曹植は「大暑賦」において「大人」を、王粲は「大暑賦」において「帝后」をそれぞれ主人公として、権力者の豪華な避暑のさまを詠っていた。夏侯湛「大暑賦」は同じ避暑のさまを詠つてもその描写はつつましく、建安文人の表現との好みの相違が窺える。

次に、晋宋のころの人、卞伯玉の「大暑賦」を見てみたい。卞伯玉「大暑賦」も建安文人の「大暑賦」作品群に似通うものの、天文に関する独特の描写が注目される。たとえば大火（さそり座 α アンタレス）は繁欽の「暑賦」にも「大火颺光、炎氣酷烈（大火 光を颺げ、炎氣 酷烈たり）」と詠われていたけれども、卞伯玉「大暑賦」の天文の描写はさらに詳細である。

日貞曜於鶉首、律遷度於林鍾。温風翕以辰至、星火爛以昏中（日 鶉首に貞曜たり、律 度を林鍾に遷す。温風 翕りて以て辰至り、星火 爛きて以て昏に中す）。

（太陽は〔十二次のひとつ〕¹⁸ 鶉首の位置にぎらぎらと輝き、律の度数は林鍾に移る。熱風が集まり「辰」（心宿、二十八宿の一、さそり座 σ を距星とし、さそり座 α アンタレスを含む）が昇り始め、星火（「さそり座 α アンタレス」は激しく輝き、昏の時刻に南中する。）

まず、鶉首の定義について確認したい。鶉首は十二辰（十二次に同じ。以下、「十二次」の語で統一する。）の一つ。『漢書』律曆志下によれば、同じく十二次のひとつ鶉火の前なので、天の赤道および黄道においては鶉火の西側に当たる。『漢書』律曆志下は鶉首の節氣を芒種、中氣を夏至に配当し、鶉火の節氣を小暑、中氣を大暑に配当する。この記事に従うならば、大暑は十二次の鶉火に配当されるため、太陽が鶉首の位置に輝くのは大暑より約一ヶ月早いはずなので、矛盾が生じる。

筆者は、この矛盾の解決策として二つの解釈を指摘したい。

一つ目の解釈は、卞伯玉の「大暑賦」の天文の記述は『漢書』律曆志や『後漢書』律曆志よりもむしろ『礼記』月令・季夏之月に基づくと見るものである。『礼記』月令・季夏之月には、「季夏の月、日は柳りゅうに在り、昏くわんに火くわ中ちゆうし、旦たんに奎けい中ちゆうす」と見えるので、日躔りつせんは柳りゅう（二十八宿の一、うみへび座デルタを距星とする）、昏中星くわんちゆうせいは火か（さそり座アルファアンタレス）、旦中星たんちゆうせいは奎けい（二十八宿の一、アンドロメダ座セータを距星とする）である。昏中星くわんちゆうせいを火か（アンタレス）とする記述は卞伯玉「大暑賦」と一致する。

ただしこの解釈を取るためには、解決しなければならない問題点がある。『礼記』月令・季夏之月の日躔、昏中星、旦中星の記述は、二十八宿の度数の記事もなく、『後漢書』律曆志等の記事に比べ大幅に精密さを欠くことである。暦法が相当の発達を遂げていた晋宋のころに、いくら『礼記』が尊重されていたとは言っても、このように精密さを欠く記事に基づくものか疑問が残る。

そこで、筆者は、第二の解釈として、卞伯玉の「大暑賦」に見られる天文の記述は、東晋の虞喜による歳差運動の発見の影響を受け、日躔の西への移動に着目して詠うことにより新しさを演出したものと見る解釈を提唱したい。つまり「日貞曜於躔首、律遷度於林鍾」の二句は東晋から宋ごろの大暑の時期における天象の実景を詠ったものと解釈するのである。大暑の時期の星火せいしか（アンタレス）の南中は、歳差運動により恒星が西に移動し、昏中星が『後漢書』律曆志の尾十五度びからやや西の心宿しんしゆ（アンタレスを含む）に移った実景に一致するからである。

卞伯玉は「大暑賦」に「温風」「溽暑」の語を盛り込むなど、建安文人の「大暑」と「六月」「季夏之月」の配当へのこだわりを受け継ぐいっぽう、日躔までも詠いこみ、工夫を凝らしている。その天文の描写については、『礼記』月令・季夏之月の記事に基づくと可能性と、最新の天文知識を取り入れた実景の可能性の二つを指摘できる。

ここで、第二節で分析した、建安文人の「大暑賦」作品群における「暑さ」の描写の要素A～Fのうち、夏侯湛の「大暑

賦」と卞伯玉の「大暑賦」に継承されている要素を分析するなら、A「夏の到来」、B「作者自身が捉えた暑さの感覚」、C「作者が暑さに苦しむ様子」、D「天地、山川の様子」の四つが該当する。

このうち、本節で論じた夏侯湛の「大暑賦」の工夫は、A「夏の到来」、B「作者自身が捉えた暑さの感覚」に集中し、卞伯玉の「大暑賦」の工夫は、A「夏の到来」とD「天地、山川の様子」に見られる。

以上、西晋の夏侯湛の「大暑賦」、晋宋ごろの人、卞伯玉の「大暑賦」の内容を検討した。この二篇は建安文人の「大暑賦」作品群を踏襲する傾向が強いものの、それぞれ一部に工夫を凝らし、新しさを演出しようとしているのである。

おわりに

小稿は、建安文人の「大暑賦」作品群の内容を検討し、同時代の詩との比較、およびや後の魏晋の詩に与えた影響、晋宋の同題の賦に与えた影響について考察してきた。

ところで、建安文人の「大暑賦」作品群の価値はどこに認められるだろうか。また、これらを発達させた原因は何に求めることが可能であろうか。

先行研究は、季節をテーマとする作品の急速な発達については論じてきたけれども、その原因として、漢代以降の天文や暦法の発達はあまり考慮に入れられていなかったように思われる。筆者は、文人が季節をテーマとする作品を大量に制作した動機の一つに天文や暦法に対する興味があつた可能性を指摘したい。また、これらの作品の制作が天文や暦法に対する関心をますます高める役割を果たした可能性も併せて指摘したい。藪内清は、中国における天文や暦法の発達に関し、思想の潮流や科学的精神の発達という角度から優れた分析を行った²⁰けれども、今後は文学作品との関係も検討する必要があるのではないだろうか。

建安文人の「大暑賦」作品群は、『礼記』月令の語彙を取り入れつつ、曆法にも着目した知的な面白さがあり、かつ作者自身が捉えた体感的な描写や、諧謔性も見られ、多彩な表現に富む。これらの描写は、やや後の魏晉の文人の暑さを諧謔的に描く詩や、暑さを懊悩を強調する手段として用いる詩にも大きな影響を与えた。また、のちの晋宋の同題の賦の制作にも大きな影響を与えている。

これより後の時代に建安文人の「大暑賦」がどのような影響を与えているのかという問題については、稿を改めて論じたい。

注

- (1) 大修館書店、一九八六年、五頁。
- (2) 賦についての調査は、清・嚴可均校輯『全上古三代秦漢三國六朝文』により行った。
- (3) 大修館書店、一九六七年、五一―五三頁。
- (4) 詩・樂府についての調査は、遼欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』により行った。
- (5) 『曹植集校注』（趙幼文校注、人民文学出版社、一九八四年）、一五一頁において曹植の「大暑賦」を建安二十一年の作とし、楊脩と王粲との同時競作の可能性を示唆する。
- (6) 二十四節気の成立については、島邦男『五行思想と礼記月令の研究』（汲古書院、一九七一年刊、二〇〇四年第三刷）を参照した。また小論では建安文人の経学重視の態度を考慮し、天文や二十四節気について、『淮南子』天文訓や『呂氏春秋』十二紀等の記事は参考にとどめた。
- (7) 『漢書』律曆志下にも「大暑」に関する言及があるけれども、『後漢書』律曆志の記述と差異がある。十二の辰（＝十二次）について説明があり、その一つ「鶉火」について言う。（一）内の部分は原文の小字双行注、
鶉火、初柳九度、小暑。中張三度、大暑。（於夏為六月、商為七月、周為八月。）終於張十七度。
（鶉火は太陽が柳（＝二十八宿の一、うみへび座）を距星とする）の九度にある時に始まり、その時が小暑。中ごろ張（＝二十八宿の一、うみへび座）を距星とする）の三度にある時が大暑。（夏の時代は六月、商（＝殷）の時代は七月、周の時代は八月にそれぞれ相当する。）張の十七度までが「鶉火」である。
- (8) 「辰者、日月之会而建所指也」と説明されているので辰とは日躔である。この記述はもっぱら十二辰（＝十二次）を説明するためのものであるから、二十四氣を明確に定義している『後漢書』律曆志を優先した。
- (9) 元嘉曆は「大暑」の日躔を柳（二十八宿の一、うみへび座）を距星とする（の十二（度）弱とし、西側に数度動かし、昏中星・旦中星も同程度移動させ、歳差運動を考慮に入れたものとなっている）。
- (9) 戴内清『中国の天文曆法』（平凡社、一九六九年）第一部・一「漢代の改曆とその思想的背景」によった。前漢の武帝の時の太初曆の後の代表的な曆としては、後漢の章帝の元和二年に施行された、いわゆる後漢四分曆がある。

- (10) 『中国文学に現われた自然と自然観』(岩波書店、一九六二年)の一〇四頁に「いつたい、魏晉以後の文学作品に、秋が描写される時、常に月令的景物が現われるというのはなぜであろうか」とある。
- (11) 曹植「大暑賦」のテキストは原則として清・丁晏纂、葉菊生校訂『曹集詮評』(文学古籍刊行社出版、一九五七年)によるけれども、作品としてのまともを考えると、『芸文類聚』巻五所収の部分を受け、それ以外は佚句と見なす。
- (12) 王粲「大暑賦」のテキストは原則として兪紹初輯校『建安七子集』(中華書局、一九八九年)によるけれども、作品としてのまともを考えると、『芸文類聚』巻五所収の部分を受け、それ以外は佚句と見なす。第3句「喜」を同書は「熹」に作るけれども、『芸文類聚』巻五に従い、「喜」に改めた。
- (13) 劉楨「大暑賦」、陳琳「大暑賦」のテキストについては注12に同じ。また繁欽「暑賦」のテキストは原則として、清・嚴可均校輯『全後漢文』巻九十三によった。「粉扇靡救」句の「救」を同書は「効」に作るけれども、『芸文類聚』巻五により「救」に改めた。
- (14) 王粲「公讌詩」は『文選』巻二十をテキストとした。また、曹丕「夏日詩」、曹植「苦熱行」は遠欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』をテキストとした。
- (15) 程曉・傅玄の詩は遠欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』をテキストとした。
- (16) 阮籍の「詠懷詩」のうち、『文選』所収でないものは遠欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』をテキストとした。けれども、「濛汜」を筆者の判断により「濛汜」に改めた。
- (17) 夏侯湛「大暑賦」のテキストは原則として清・嚴可均校輯『全晉文』巻六十八によった。卞伯玉の「大暑賦」のテキストは原則として清・嚴可均校輯『全宋文』巻四十によったけれども、『芸文類聚』巻五に従い、「貞躍」を「貞曜」に、「晨」を「辰」にそれぞれ改めた。
- (18) 前掲藪内著書、第一部・二「漢代における観測技術と石氏星経の成立」に「十二次は『左伝』においてもつばら歳星の位置を示すのに用いられており(中略)十二次は二十八宿とならんで、ほぼ同じ目的をもつ一段低い精密度の観測に有効なもので、従って両者を併用する必要はなく、そのいずれかがあれば十分である。(中略)十二次は先秦の古文獻では『左伝』、『国語』にみえるだけであり、漢代になって再び文獻にみえるようになるが、中国自体の天文学からみて副次的な役割しか果たしていない」と述べられる見方に従い、小稿は文学作品の読解に際し、恒星の位置については二十八宿を基準とし、十二次は副次的に考えるに止めた。
- (19) 前掲藪内著書八十一頁に「東晋の成帝の咸康年間(三三五―四二)に、虞喜がはじめて歳差を知ったことが注目される。虞喜は同一節気に対し、毎年太陽の位置が西へずれ、その割合は五〇年に一度であるとした。歳差定数としては決してよくないが、中国における歳差の発見者としての虞喜を見落すことはできない」と見える。
- (20) 前掲藪内著書、「中国の天文暦法」第一部。

